

可能性を引き出してくれるもの 自分を成長させるチャンス

くも膜下出血になると、30〜40%の人が死亡、約30%の人に後遺症が残り、元通りに戻れるのはわずか30%にすぎないと言われる。原因の8割を占める脳動脈瘤（破裂）の代表的な手術法である「脳動脈瘤クリッピング術」の症例数が1500を超え、日本でも有数の脳外科医として知られる佐藤昇樹さん（51）。約25年に渡り、第一線の脳外科医として24時間体制の医療を実践してきた。2005年3月、自身の心臓手術を

医療の集約

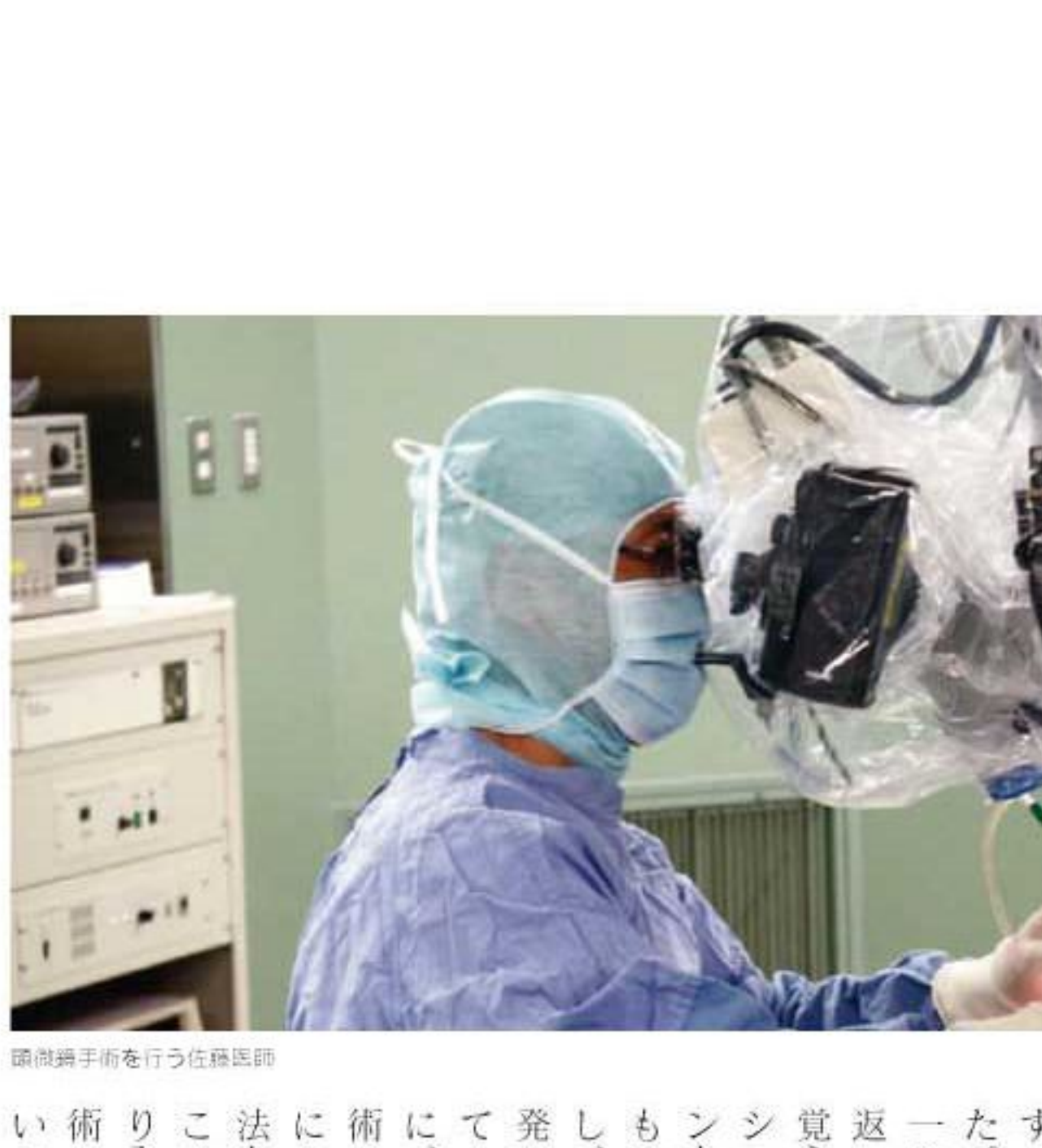
脳外科医・佐藤昇樹は、常に真摯な姿勢で医療と向き合ってきた。約25年間の勤務医時代、「私にとって、くも膜下出血というのは医療の集約。すべてに優先する」と、病院から歩いて2分の距離に居を構え、年間150件を超える急患に対応してきた。病院と自宅を内線電話で結び、連絡が入れば昼夜を問わず治療に駆けつける毎日だが、「これは脳外科医としてはごく当たり前のことで、それを苦に思っただことはない」と笑う。「技術を磨くことに、これで終わりという地点はない」と修練を重ねてきた佐藤。その上で、「技術の向上がすべて」の解決策になるわけではない。技術ばかり目を見張らせるのではなく、この人なら、もし結果が悪かったとしても納得できると、患者さんが心の底から任せてくれるような医師になるための努力を続けることが肝要であり、医師の担うべき側面医療の重さを認識できたときに初めて、一人の患者さんの信頼に耐え得る医師になることができるのでは」と話す。

原点

佐藤の医師としての原点は、大学3年生のときに経験した父親の死だ。発熱からわずか3日後、急性肺炎で他界した。

真摯

当時は大田記念病院で救急医療が取り扱われていなかったこともあり、大学卒業後は医局に残らず、開院4年目ながら脳外科の



真摯な姿勢で医療と向き合ってきた佐藤昇樹さん

手術

脳外科の手術は命と直結するだけに、術者は常に緊張感や恐怖感にさらされるという。手術に臨むとき、佐藤はシュミレーションを欠かさない。手順を具体的にイメージしていき、すべての行程をクリアに思い浮かべていく。起こりえる事態も想定し、曖昧ではやけるところが一つとして準備を繰り返して、入念に準備を整える。実際の手術では、シュミレーションでやったことを実行していく。しかし、どれだけ十分に準備をしたと思っても、想定外や突発的な事態が起こるケースもある。そんなときは、それまでの経験や知識をもとに、頭の中にあるすべての智慧を搾り出し、理性と感性で最善の方法を見つけ出し、手術を進める。「難しい手術が難しそうに見えずに終わるのが理想的な手術」と佐藤は言う。



脳動脈瘤手術を行う佐藤昇樹さん

魂のふれあい

救急車で運ばれ、緊急手術しないといけないという緊迫した状況下では、人は心の鎧を脱ぎ捨て裸になるという。「向こう（患者や家族）もこっち（医師）も必死。だからこそ、初対面であっても、そこには人と人の魂の触れ合いがある」と佐藤は言う。「その命が自分の手に委ねられたとき、一他（ひと）の一切を忘れて、その命を救うことだけに没入できる。目の前には、この人を救うためには、自分が生きていく意味があるという存在を感じる事ができる」。



前夜の佐藤昇樹さん。手術を執刀した患者らと

開業

2005年3月、49才のとき、佐藤は心臓弁膜症と診断され、手術を受けた。自分が患者になって初めて「（患者さんが）言っていたのは、こういう痛み、苦しきだったのか」と実感した翌年の夏、26年勤務した大田記念病院を辞し、心臓脳外科クリニックを開業した。51才を目前に控えた



わかりやすくて丁寧な説明し、患者が納得できる医療を提供

さとう脳外科クリニック

脳外科医 佐藤昇樹さん

広島県福山市大門町3-28-43
TEL: 084-940-5855
http://sato-nougeka.com/

1955年生まれ、岡山市出身。1980年、岡山大学医学部を卒業し、大田記念病院（福山）へ。81年、米国・Mount Carmel Mercy 病院に留学。83年、大津市民病院の腎臓外科へ国内留学。85年、脳神経センター大田記念病院の副院長、91年同院院長に就任。同年、「脳動脈瘤の手術」で、第11回日本脳神経外科コンgres優秀手術ヒトテオ賞を受賞。92年11月には世界的に有名な脳外科医、ドイツ・マインツ大学のPerneczky教授の下へ留学。2006年10月、「さとう脳外科クリニック」を開業。今年5月に結婚式を迎え、夫人と共に二人子や散歩を楽しむ愛妻家でもある。

「悠飛社刊」の最後を次のように締めくくって「自分は手を取らなくても、患者さんと手を取らなくても、思いつくだけ医療の本質を具へていく。先を追い求めていきたい」と思っています。

変えられるものを変える勇気を持つ脳外科医は、これからの自分の使命を感じ取ったのかも。それは、ほかにないから」と佐藤は笑う。

豊富な経験と実績、磨き抜かれた手技と卓越した技術、懇切丁寧な説明、患者への思いやりと優しき眼差し……。数え上げればきりがないほど、名医と呼ばれる自分がどこまでやれるか、これぐらいでいいだろうという、他人に評価されるための合格点を狙うのではなく、精一杯、自分のやれることを徹底的にやり通す。人間の能力は無限に広がる。遭遇して初めて引き出される。自分の能力のレベルを、意識的に少しずつアップさせ、（本文は敬称略）

「さとう脳外科クリニック」を開業した。51才を目前に控えた

くも膜下出血とかく戦いき

佐藤昇樹

神秘の世界に好奇心をこめて、今日もメスを...